

ヨセフ

創世記の最後の話。(創世記の 4 分の 1 を占める物語です)

ヤコブの 12 人の息子のいちばん末のヨセフは「兄さんたちの麦束が自分の麦束を拝んだ」と夢で見た話をし、このことが兄たちの怒りをかって、彼はエジプトに売られてしまいます。

ところがヨセフはその後エジプトでファラオの夢の謎を解き、出世して宰相になり、家族と再会します。(創世記 37-50) 夢は 7 年間の豊作とそれに続く 7 年間の凶作であるとヨセフは説明します。

熱帯にあるエジプトはナイル川が毎年氾濫して豊かな穀倉地帯となっていました。ギリシャもローマ帝国も土地はやせていて、エジプトのコムギを輸入しなければやっていけなかったのです。ここにエジプトとギリシャ、ローマとのさまざまな歴史が繰り広げられたことはご存知のとおりです。

物語はエジプトに起こった大飢饉が背景となっていますが、エジプト学者の吉村作治氏は「古代エジプトでは、飢饉の状況というのは、3000年で3回ぐらいしか記録がないんですね。ですから、よっぽど旱魃がないかぎり、飢饉はおきなかったのです。しかも水源はナイル川で、アフリカの熱帯にあるのですから、水量が安定していたんです。」

参照：岩波新書 増田善郎・吉村作治「インカとエジプト」

つまり千年に一度の大飢饉です。エジプト人た

ちがファラオの夢の意味を解釈できなかったのも当然です。ここにヨセフという人物が登場し聖書の話は、アブラハムの子孫たちの物語からイスラエル民族の歴史へと変遷していきます。神の計画がこんな形で実現されていくのだと理解すると興味深いものがあります。



ファラオに夢の意味を説明するヨセフ (Youtube part17)